

彩色園における農学校の始まり —ぬくい少年少女農学校—

西村 俊

(東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程(B類)理科専攻 卒業生
特定非営利活動法人自然文化誌研究会 運営委員)

Beginning phase of the Agricultural School in Saishikien

*Shun Nishimura, Department of Chemistry, Tokyo Gakugei University (Graduated Student)
The Institute of Natural and Cultural History (Member of the Steering Committee)*

はじめに

自然文化誌研究会(現 NPO 法人)は、東京学芸大学公開講座として、農山村のフィールドを活かした自然・生活体験活動「冒険学校」を開講していました(1-3期:五日市、4-5期:奥秩父、6-13期:中津川村)。14期冒険学校を開講する際に、新たなスタイルの生活体験活動へと挑戦するための一歩として、東京学芸大学構内の農場「彩色園」を利用したデイキャンプを開催しました。

そして、その翌年の2002年5月から、年間を通した食農体験活動への参加によるナチュラリストの育成を目的に、東京学芸大学公開講座「ぬくい少年少女農学校」を新たに開講させました。それまでの冒険学校の活動スタイルを引き継ぎながら、大学の農場(彩色園)をフィールドとしてどのように農学校の活動が展開されてきたのか。ここでは、彩色園における農学校の始まりとして、「ぬくい少年少女農学校」の活動を紹介したいと思います。

2002年度 第一期

冒険学校時代を知らないメンバーが多く、スタッフも参加者も本当にみんなが「勝手がわからない」という手探りの状態からのスタートでした。毎回、参加者が農学校を楽しみに参加してくれるのは嬉しいのだけれど、活動前にはいつもスタッフが必死になってプログラムを練っ



図1 新たな活動の舞台「彩色園」



図2 バン釜作り(第一期)

ていました。農学校の歴史の中でも、創成期ならではの「参加者との接し方や働きかけ、農学校とは何だろうか!」という議論をたくさん交わした時代だったように思います(この議論は



図3 基地作り（第一期）



図5 初めてのごぼうの収穫に苦戦（第二期）



図4 バームクーヘン作り（第一期）



図6 小菅村でのそば打ち体験（第二期）

農学校 13 年目の 2013 年現在もなお続いているのではないでしょう（か）。

畝^{うね}を立てるのにも一苦労の種まきから始まり、ほおの葉でのちまき作り、泥んこの田植え、ミクロハイクを使った彩色園の地図作り、基地・パン釜作り、太い竹を使ったバームクーヘン作り、身近な野菜（玉葱の皮、茄子の皮、トマト）を使った染め物 T シャツ作り、鍋パン作り、芋版、芋煮会、正月飾りなどなど盛りだくさんの 1 年。木俣先生（カツンボ）、原子先生（アトム）のアイデアや助言に助けられながら、何とかやり遂げたぞ!!! という 1 年でした。（参加者 17 名、スタッフ 25 名）

2003 年度 第二期

1 年目のスタッフは主に東京学芸大学 F 類環境教育の学部生が中心となっていた農学校ですが、2 年目には大学院生・社会人・他大学の学生とスタッフのバリエーションも多様化し、より多彩な活動となりました。夏には、山梨県小

菅村への宿泊キャンプも企画。1 年目と比べても、飛躍的に忙しさが増した年でした。

この年の思い出といえば、失敗の連続…。高くし過ぎた畝のおかげで強風によりトウモロコシの苗が倒れ、もち米の蒸かし加減が分からずにべちょべちょのお餅つき、白菜とのらぼうは冬の霜と鳥たちに根こそぎ食べられ、ほとんど収穫できませんでした。「農学校なのだからもっと畑・田圃への関わり方を強めよう！」と畑作りや田畑の手入れに重点を置いた年だったのですが…。失敗は成功の肥やしとはよく言ったもので、この年の失敗談は今でも強く記憶に残っています。

大豆からの豆腐作り、収穫祭（野菜料理大会）、どろんこ稲刈り、小菅村での文化体験（夏季の農山村宿泊体験活動）、樹木の葉を使った染め物、竹を切ったの流しそうめん、腐葉土作り、注連縄作りなど、急激に活動を拡張した年でした。（参加者 14 名・スタッフ 30 名）

2004 年度 第三期

この年は、定員の25名をはるかに超える応募（41名）がありました。せっかく活動をしているのだから出来るだけ多くの子どもを参加させたい！という想いで、田畑をさらに拡張して、大人数を想定した活動計画・スタッフ配置を考えて、2013年現在の農学校までを考えても、この2004年度が最も大きな規模の農学校を運営した年なのではないかと思います。そして、規模の大きさにさらに翻弄された年になりました。活動日は全部で10回、宿泊も2回（夏と冬）に増えました。

活動の新しいアイテムとなったのが「スケッチブック」。その日の活動内容や気が付いたこと、感じたこと、疑問に思ったことなどを絵や言葉、写真や押し花などで書きました。次の活動の時には、前回の振り返りを配って貼ることで、農学校の年間の活動のつながりをより強く感じられるアイテムとなったと思います。

檜原村の山の中まで活動用の間伐材を取りに行つての木工・薪割り・東屋づくり、アイヌの浦川治造さんをお招きしてのアイヌ料理体験（夏季の彩色園での宿泊）、本物の農家の現場を見学（参加者より背丈の高い野菜に囲まれて、職人技に感動）、太陽光でお風呂を沸かそうプロジェクト、夕顔でのかんぴょう作り、創作料理大会、ジャンボカステラ作り、「植物に名前を付けよう！」プログラム、鮭のチャンチャン焼き作り、竹で水鉄砲作り、新しい活動プログラムがたくさん生まれた年でもありました。活動写真の数は、なんと過去最多の2570枚もありました。（参加者30名、スタッフ40名）

「ぬくい少年少女農学校」から新たなスタイルへ

農学校で初めて包丁を握った人、野菜嫌いだけれどちょっとずつ食べられるようになった人、学校や年齢の枠を超えた仲間ができた人、土に触れるようになった人、昆虫に触れるようになった人、ちょっとお父さんお母さんから自立し始めた人、子どもと接するのが平気になった人、人前で喋れるようになった人、たくさんの参加者・スタッフの成長の場となった「ぬく



図7 小金井市の農家訪問（第三期）



図8 ジャガイモの収穫（第三期）



図9 アイス作り（第三期）



図10 玉ねぎの皮を使った染め物（第三期）



図 11 集合写真（第三期）



図 12 夏季収穫祭の成果（第二期）

い青少年農学校」。

「種から胃袋まで」（中尾佐助）の体感をテーマとした3年間の生活体験活動には、のべ人数159名（参加者61名、学生スタッフ数98名）の人々が携わりました。

しかし、活動が続けていく中で、農作業、文化体験、調理、安全管理、多くの面で規模とスタッフの力量・容量との兼ね合いに課題を感じ始めていました。たくさんの年齢の子どもや大人が同じ場に居るほど、活気がある疑似社会ができる。しかし、今の慌ただしい形態が農学校のコンセプトに合っているのだろうか。そんな疑問を持つ声も少なくありませんでした。

農学校のテーマは何だったのか？ 何を伝え、何を感じてほしいのか？ その初心に立ち返るために、農学校は「ぬくい青少年農学校」から新たな形の農学校へと歩むことになりました。

ちえのわ農学校へ

もっと参加者との関係を深めながら、一人一人の成長に寄り添える活動をしたい。農学校の枠を超えた発展的な活動を目指して、「ぬくい青少年農学校」のスタッフが中心となって2004年夏に立ち上げたのが環境教育実践サークル「ちえのわ」です。「ちえのわ」では、「種から胃袋まで」の体験と昔ながらの知恵や文化に触れることで、「自然＝命のつながり」の中の自分を感じることに重点を置き、より身近な視点から農耕文化基本複合を用いた食農体験学習を進めています。

その活動の中で「ぬくい青少年農学校」も新たに「ちえのわ農学校」として継承されました。2013年の現在では「第9期ちえのわ農学校」も開校し、農学校は通算13年目の活動を今も歩み続けています。

* 本稿は、自然文化誌研究会「冒険学校の歩み」に掲載予定の原稿（2011年2月執筆）の一部を再構・追記したものです。